

# ねこの みみ

猫 類 通 信

第 3 1 号

平成十年

(1998)

4月15日発行

(年4回発行)

無心所着考

東 明 雅

前号に私は空撓という付け方について述べたが、その空撓に似て非なるものに、無心所着という付け方がある。

万葉集卷十六に「無心所着の歌」として、  
1 我妹子が額に生ふる 双六の 牡の  
牛の 鞍の上の瘡(女房の額に生えた双六盤の大きな牡牛の鞍の上の瘡)  
2 我背子が 積鼻にする 円石の 吉野  
の山に 氷魚ぞ懸れる(亭主がふんどしにする丸石の吉野の山に氷魚がぶら下がっている)の二首が載っている。

無心所着とは、このように歌の各句に別々の事を詠みこんで、一首としての全体の意味が全く通じない歌のことである。

この無心所着は和歌の上でも連歌でも、否定され、歌の病と言われて来た。たとえば鎌

倉時代の歌論書「八雲御抄」では、著者の順徳院は、つまらないもので、悪く詠めば全く歌の体をなさないと否定し、室町時代の連歌論書「ささめごと」でも、心敬は

1 月やどる水のおもだか鳥屋もなし  
2 花やさく雨なき山にかけまくも

などの例をあげているが、彼はこの手法を否定していない代り、肯定もしていない。

和歌・連歌の伝統を濃厚に受け継いだ貞門の俳諧においては、たとえば北村季吟などは、俳諧の祖と言われる荒木田守武の作品につき、

1 夕時雨親孝行の雲井にて  
2 鹿の音ちかきつゞらくしほこ

などに対して、「守武は中比の作者ながら、誹諧をわたくしになぐりて式法をやぶり、花に吉野をも嫌わず、かく無心所着にいひなしたる人なればにや、近代都ほとりには其風用る人なくなり侍し」と非難している。

ところが、京都の季吟がこのような発言をした延宝初年のころ、大阪を中心とする町人文化の発展は、その経済的優位性を背景に、旧い文化伝統の破壊とともに新しい俳諧を生み出した。このいわゆる談林派の中心となつたのは西山宗因・井原西鶴・岡西惟中の面々であるが、宗因は京都の惣本寺高政に与えて「末茂れ守武流義惣本寺」と詠み、西鶴は、「遠き伊勢国みもすそ川の流を三盃くんで酔ったと守武の系譜をもって自任し、惟中はその著「俳諧蒙求」の題簽に「俳諧蒙求竝流」

と書き、すべて歌・連歌においては、一句の義明らかならず、いな事のように作り出せるは無心所着の病と判せられたり。俳諧はこれにかはり、無心所着を本意とおもふべし」とまで言っている。

談林の新しい俳諧と一口に言っても、実は宗因・西鶴らの軽口、速吟、惟中の寓言と方法にはやや異なるものがあるけれども、これが守武流儀の俳諧、無心所着の方法として一世を風靡したのであった。

この談林の新しい俳諧運動は、要するに旧い文化伝統に対する否定であり、遠く遡れば有心連歌に対する無心連歌の反逆であり、無心所着も軽口も寓言も要するにその手段でしかなかった。そこに談林俳諧が一時は燎原の火のように燃え上って、全俳壇を制圧したかに見えたものの、遂に芸術的完成を見ず、忽ち衰頹して行った理由があると思う。

先号で述べた空撓という手法は、七名八体の員外とされているが、それは前句に対して意識的に趣向を立てて付けるのではなく、直感的に付ける手法であり、結果として付味のないものが生まれ出る可能性もあるのに対して、無心所着は一句の中では意味が通らず、付合の場合も前句と付句とのミスマッチを殊更に願って作るものである。作品によっては空撓か、無心所着か分からぬものもあるかも知れないが、作者の意図が分れば紛るることはない。

ぼくは花の座が好き

明坂 英二

連句では初心者で駆け出しでシロウトである。そういうことはもっと初々しくいうべきことなのだろうけれど、とにかくそうなので、と、こう書いておかないと、ここから先に進めない。

花の座が好きだ。特に、名残の花。たまにこの栄光の座を受け持たせていただく順に当たったりすると、やや上気する。

なぜだろう？ いままで改めて考えたこともなかったが、華やかに、美しく、めでたく自由闊達、威風堂々、好きなように声あげて歌ってよろしい、と晴れてお墨付きをいただいている、そのうれしさのゆえか？

思えばまことにいろいろと気を遣ってきたのであった。ぼくは永年、犬と暮らしてきた自他ともに許す犬好きなので、機をねらっては、犬を登場させたい。

かばうてくれとせん息の犬などどつくって、捌きのGさんに「いとも哀れ深いね」とほめられたりすると、おおいに満足する。それが連衆のKさんに、

ノラの御慶を受くる濡縁  
なんぞと手早く猫の句を出されては、もう犬が出せない。ぜったいに出せないということ

もなかるうけれど、歌仙の流れを一步たりとも後戻りさせるようなふるまいは許されまいと、気を配る。あるときは立ち止まり、眺めてみて、どうだろう、このあたりで恋を仕掛けて一波乱起こしたほうがいいのでは、とひねり出してから、あ、これでは月の座のSさんに月も恋もいちどに背負い込ませることになる、ご迷惑かと遠慮する。それからまた自分ばかりストーリーのある句をつくって目立とうとしてはいけない。ここはそんなに事を構えるところじゃない、さあ肩の力を抜いて、と自戒する。さらりといこう、さらりと。いや、まだ力が入っているぞ。さらり。だめだめ、それ、さらり、さらり……かくて、今や花の座に至る。うれしくなくて、どうあろう。

ぼくの好きな花の句を掲げる。あの熱田三歌仙「何とはなしに」のほひの花。

常盤山常盤之介が花咲て 桐葉

物の本によれば、常盤山も常盤之介もこんな山や人物があったわけではないので、つまり架空の地名、人名なのです。それが実に利いている。奈良の都でも飛鳥山でもない。花咲爺でも義経でもない。なんと自由で透明で愉快なんだろう。こんなにとほけた花の句をつくってみたい。盛りの花の、うそを言葉で飾ってみたい。

いま、ぼくは不用意に「うそ」と書いた。待てよ、うそとまこととは、そも連句の神髓

ではなかったか。もう少し正確を期すなら、うそとまことの兼ね合いとは。

付かず離れず、という。付くのがまことなら、離れるのがうそ。まことは、わりにやさしい。だいたいが人間はまことということに道徳とか人生のプライオリティーをおいているから、だれにもまことは語れる。じょうずなうそは、むずかしい。すなわち、付くは易にして、離るるは難し。いちばん簡単なのはべた付きというやつで、かくいうぼく自身も何回付け過ぎの愚をおかしたことだろう。数えきれないし、いまでもそうだ。

虚実皮膜という。どこかでかそけくつながら、ひらりと跳んでみたり、ひねってみせたり。じょうずにうそをついて、離れられるぎりぎりのあわいで連句という絵巻のシーンを交転させてゆくことができれば。連衆がそうやって互いにうその手妻を遣いあい、変幻自在、歌仙一巻を巻くことができれば。

それも、どんなものだと、あからさまにはなくて、ひそかに気を通じあい、上品に色変わりの球を受け渡ししながら。

——花の座の楽しみという話が妙なところへ移ってしまった。そうだ、ここでもうひとつ、ぼくの好きな花の句を。五年ほど前、興行された手練れの詩人たちの半歌仙から。

落花浴び象の望郷完了す 別所真紀  
じょうずなうその句ですね。花の座はハレなうそであるほどいい。(エッセイスト)

「東欧五ヶ国バス紀行・この壁を」の巻

鈴木慎二

五ヶ国とは東ドイツ・チェコ・スロバキア・オーストリア・ハンガリーのこと、旧共産圏のため一昔前まではそう簡単には行けなかつた地域だけに少しく興味をそそられた。

ご他聞にもれず三十数人のツアーのひとりとして参加した訳であるが、私はご同行の連中とはできるだけ打解けられる様にしたいと思ひ旅の初手から、私のことを「なまえ」で、つまり「しんじ」と呼んでもらう様頼んだ。連句の世界ではよくやっているあの雰囲気はよろしからんと考えたからである。

「しんじさん連句ってどんなものなんですか」「俳句はご存じでしょう、あれの親元ですよ。数人が座というものを作って五七五と七七を交互に繋げていって全体で一つの巻にします」

「ははあ……？」こんなことで理解される訳もなく、連句というものが俳句に比し未だ一向に人口に膾炙されていない実態に触れる。こうなりや実例でいくしかないか！

「今僕は冷戦の残骸の前に立っていますね。これを見て何かお感じになるでしょう、それをちよつと定形のことばにしてみましよう」

東ベルリンで

この壁を越えて射たれし人あはれ 付けて、  
恩讐かなたブランデンブルグ門

一行はポツダムに移動。ポツダムといえは我々日本人には、チャーチル、トルーマン、スターリンが対日戦争終結の密議をこらした国際政治の一種冷まじき場所という印象だけが強いが、何と曾ての王侯貴族の伸やかにして美しい、今でいうリゾート地なのであった。ただし戦後ながくソ連が支配していた為や荒れた状態が続いていた。

あの戦争終はらせし庭雅にて

星型花壇赤く鮮やか

「なるほど、自分で見たり感じたことを定形の言葉にまとめればいいんですね、面白い」と作成形式だけは少し理解して下さった様だ。

ベルリンに戻り

塩濃きも味さすがなりソーセージ

朝の挨拶グーテンモルゲン

都市に突如森

官邸に旗ありてなほ森ありて

エルベの橋に淡き月影 (ドレスデン)

と調子に乗って続き、これで一日目が終る。

「昨日のはいいいじゃないですか、今日のは？」などとバス移動のつれづれにノートを数人から覗きこまれたりする。

ここで武蔵は考えた。いっそ、この連句風の技法でこの旅の《日記代わり》にしてやろう！ 目を追って作っていくだけであり、式

目作法を不問とされているのであるから、勿論これは連句とは言えないが、ご連中は些か興

味を持った感じもするので、図らずも紀行中七十二句続ける仕儀とは相成った。今となつてはこれが独吟であり連中を作句に巻き込めなかつたのがいささか残念ではあるが。

数千の古城の景はパノラマに (プラハ)

「新世界」なる曲想がふと

辻楽士春高樓の花の宴

つい投げ銭でいいところを見せ

ウィーンの風ひんやりと目を醒ます

杜の小徑に巨大なめぐち(オーストリア)

古城背にちよいと背広を肩にかけ

ワイン村にて歌ふシャンソン

全国の見知らぬ人を友とせん

またの逢ふ瀬を夢に見てこそ (抜粋)

§ 猫養会案内 §

◇ 猫養会 七月十五日 江東区芭蕉記念館

歌仙興行 正午より

◇ 『猫養作品集Ⅷ』(千八百円)が出来上りました。多数お求めください。

〒二七七一〇〇五 柏市加賀二一十二一十一

梅田利子 宛

歌仙「石の蛙」

東明雅捌

初懐紙石の蛙も這ひ出でよ 明雅  
 文運願ひ飾る蝶 欣二  
 ミルフィーユ銀の小皿に運ばれて 千町  
 CD選ぶあれやこれやと 利子  
 火の山の端にかかりて丸き月 佐紀子  
 角力をまねて四股をふむ吾子 靖子  
 秋風が裸の尻に吹いて来る 二  
 上甲板にとぐる巻く綱 町  
 キャプテンは伊達でおしゃれのやさ男 雅  
 茶髪の子ピカソばりなり 二  
 すててこを履いて神田の祭見に 靖  
 鰻をさばく月代の店 利  
 またひとりお縄になった総会屋 同  
 ダイオキシもふえるばっかり 町  
 プロバンス野に野仏のマリア像 二  
 吟遊詩人の足も軽やか 利  
<sup>ナオ</sup> 天地の森閑として花に佇ち 佐  
 屋根裏ひそと抱卵の鳥 町  
 家中が入学転勤泣き笑ひ 靖  
 シッターチャンス逃すハクシヨ 町  
 ボス猿のすごすご下りたボスの地位 利  
 新人候補急ぐ根廻し 靖  
 白靴を履いてでてゆくPTA 佐  
 焼酎の酔かすむ蝙蝠 二  
 攫はれて酒呑童子の思ひ者 町  
 盗聴マイク拾ふ睦言 靖  
 高潮の岸に寄すると知らせ来て 佐

壺中の秋をひとり楽しむ 靖  
 十三夜稽古始むるサキソフォン 利  
 縁の隅にて威張る蟻螂 二  
<sup>ナオ</sup> 風神と雷神遊ぶ古屏風 町  
 小火鉢抱きて眠る婆様 靖  
 当り籤しまひ所をつい忘れ 利  
 雪解の川に流す笹舟 佐  
 花の下耳をくすぐる京訛り 二  
 陽炎に消ゆジョギングの人 雅

平成十年一月二一日於江東区芭蕉記念館  
 連衆 諏訪欣二 原田千町 梅田利子  
 間佐紀子 佐伯靖子

歌仙「寄せ太鼓」

大窪 瑞枝 捌

綱取りを期す初場所や寄せ太鼓 瑞枝  
 きりりと緊まる大寒の土 健悟  
 厨房の仕込みの電話口早に 英子  
 硝子の向ふキューの手を振る 弘子  
 月渡る道あり高層ビルの間 志世子  
 予備校帰り木の実拾ひつ 悟  
<sup>ウ</sup> 丹精の新酒やうやく搾り終へ 弘  
 賽ころ持たぬ夫はたのもし 悟  
 支へ合ふ不器用二人明るくて 志  
 パッチワークで取りし金賞 英  
 新党の我も我もと党首なり 弘  
 老舗の蕎麦はつなぎ使はず 悟

風探すごとく風鈴鳴り出だし 弘  
 涼しき月を斬って虚無僧 悟  
 振り向けば梁の上より睨む猫 志  
 マリオネットの兎等を笑はせ 同  
 ダムになる三峽の町花ざかり 弘  
 あすは売らんと画眉鳥の籠 悟  
<sup>ナオ</sup> 陽炎の石にひろげる写生帳 志

私服刑事の覗く弁当 悟  
 拷問の噂いつしか囁かれ 弘  
 ヴィオロンの弓弦の切れたる 志  
 先生の夢分析も解けぬ恋 悟  
 つくしてもああ人の妻なの 弘  
 リストラでもどりし故郷冬ごもり 同  
 消息軽くファックスにする 英  
 大振りの椀に目玉の潮汁 同  
 古式包丁司る禰宜 枝  
 三角縁神獸鏡を月に掛け 同  
<sup>ナオ</sup> 駅前時計露の刻々 英  
 臥す友を励まし来ればそぞろ寒 悟  
 「レディジョーカー」読みさしたまま 弘  
 混沌の行方は見えず世紀末 同  
 ひねもす轆轤廻す工房 悟  
 花も雪も払うて舞のはんなりと 枝  
 山脈遠くかかる春雲 志

平成十年一月二一日於江東区芭蕉記念館  
 連衆 佛淵健悟 佐古英子 市野沢弘子  
 秋山志世子

歌仙「栢楨の」 久保田庸子捌

地に触れる栢楨の枝初日影 庸子  
 土龍送りに勇み立つ子等 あかり  
 春スキーワックス調合きりもなし 澄子  
 雪解情報流す有線 嬭  
 異国の友と親しむ朧月 政志  
 また一番と碁盤持ち出す 英二  
 觀光の目玉は慶喜郷土館 志  
 相も変はらぬおかめ火男 嬭  
 リストラの対象外を恋の餌に り  
 蛇の寝莫座で雑魚寝きめ込む 澄  
 使はずに又も終りし蠅叩 嬭  
 手もかからずに育つ少年 二  
 山の村お化け西瓜が盆棚に 澄  
 弓張月が切株の上 嬭  
 冷まじきMOF担といふ上層部 志  
 LとRの区別むづかし 二  
 文学賞決まる貼紙花明り り  
 ハの字髭のはねるうららか 嬭  
 農具市レトロの木槌よく売れて 二  
 コソソと響く空っぽの脳 澄  
 刑務所の塀長々と泥濘る道 り  
 共産党は北京支部持ち 澄  
 重ね着の引退力士ギヤグが受け 志  
 鯉えんがは酒は吟醸 澄  
 あっさりと耶蘇名を持ちて帰り来し 嬭  
 あらぬ噂に聞き耳をたて 志  
 艶やかに幾つになるの「お若いね」 澄

鸚鵡を憂しと思ふ悶絶

望の月琴の調べの嬭々と 志  
 クレヨンに画に夢のさはやか 二  
 蓮の実の飛べる水辺を離れける り  
 神獸鏡に古代史の謎 澄  
 野外ロケ移動カメラの滑り来て 二  
 同時通訳翁傘齡 嬭  
 語らひのきりなき乙女花の下 庸  
 町内会で作る大風 志  
 平成十年一月二一日 於 江東区芭蕉記念館  
 連衆 中田あかり 八角澄子 八代嬭  
 峯田政志 日高英二

歌仙「ルナ衛星」 五味蓉子捌

ルナ衛星廻れる宙や初懐紙 蓉子  
 勅題菓子のおすき紅 淳子  
 嬰を立たす草やはらかく萌え出でて佳之子 淳子  
 穴出でし蟻掌にのせ 暁巳  
 CDと連弾楽し朧月 美津  
 ゴルフ道具の手入れする夫 同  
 足元にいつも控へる盲導犬 之  
 胸の香りで分る貴方と 淳  
 ペンダント裏のイニシャル恋敵 津  
 今日運勢大吉の筈 之  
 こっそりと財布に入れる蛇の殻 津  
 諸国斬の文庫増刷 蓉

歌仙「縞馬」

下鉢清子捌

縞馬はよろけ縞着て御慶かな

清子

草原を行くバスの初旅

孝子

大掃除南面の窓拭くならん

美恵

誰が吹く笛か余韻臙に

世止彌

紙の雛上りし月に照らされて

照代

でんぐり返しの子を叱るなり

孝

サーカスの赤いテントに人の列

昌子

微笑かけるポスターの顔

恵

凭りかかる重み受け止め夢心地

昌

玉の汗吸ふ恍惚の果

彌

東山鐘遠近に明易き

孝

駅の抜け道月の影引く

照

鉦割りのかぼちゃゆっくり煮含める

恵

当主が招く利酒の客

昌

ボルドーの小さき村の小さき家

恵

『痛め』売れをりちよっと立読み

照

棹さして歌ふこの世の花筏

孝

古墳発掘春虹の下

彌

こともなげ着きをめざす揚雲雀

昌

神の怒りか続く不景気

孝

ひともしてガレのランプの妖しかり

照

ナプキンたたむ技のあざやか

恵

人ひとり危めしといふ過去に雪

孝

身の丈ほどの髪の寒荒れ

昌

アルルカン惚れられてゐて泣き笑ひ

彌

インターネットの恋はもどかし

照

蒲焼の匂ひ吐き出す換気扇

孝

仮設住宅すでに三年

うかららは月に集ひて一周忌

あれは松虫あれは邯鄲

運動会奇蹟のやうに優勝す

爺さんはまた杖を忘れる

口上に柄がちよんと入り松島屋

出し巻き卵重ね弁当

花夕べ墨象の墨磨り上げん

亀鳴くなどと尋ねゆく里

平成十年一月二一日 於江東区芭蕉記念館

連衆 坂本孝子 山口美恵 佐藤世止彌

若松照代 中野昌子

歌仙「うす味」

うす味の牛蒡里いも初懐紙

めでたく転ぶ太箸の先

雪解けにもぐらも動く気配して

買ひ物帰りちよっとふらここ

衛兵を笑はせてみる春の月

柿落しのオペラ公演

街裏に西窓小さき探偵社

ぽっきり折れた吸殻の紅

真似たきも失楽園の難きこと

浴衣ののりをきつくきかせて

新党はわけもわからず心太

筆筒貯金で守る生活

手踊りの輪の広がりぬ月の浜

酌み交すたびどぶろくの酔ひ

六甲のジョージが冬を待つてゐる

クローム磨く古いハーレー

峠から峠に続く花の道

黄塵を踏む鳥の足跡

夙合戦毛沢東の肖像画

生姜と胡麻の味ののど飴

鬼嫁の話きりなく婆ふたり

貧乏神と死神が憑く

着ぶかれて江戸の老舗をはしごする

はいから焼きに長い行列

娘への助言は電子メールなり

きょうび男は若いに限る

抱かれ上手貢がれ上手で銀流し

吉原大門灯るガス灯

月あれば彫刻刀を研ぎをりて

白樺紅葉溪を歩けば

残る蚊のさすともなしにつきまとひ

蕎麦打ち習ふカルチャーセンター

ぬひかけの唐棧縞も三年目

五輪選手の探すお土産

海坂藩城下町絵図花万葉

かへり見すればかげろひの立つ

\*「いっぷく亭」名物カステラ饅頭

平成十年一月二一日 於江東区芭蕉記念館

連衆 加藤道子 青木秀樹 金久保淑子

浅賀淑代 紺野千寿子 近藤栗子

豊

代

栗

樹

道

淑

豊

代

栗

樹

千

豊

代

道

淑

樹

栗

千

道

淑

道

栗

代

樹

道

栗

千

道

豊

栗

代

樹

道

千



歌仙「笑ひ上戸」 吉村あみこ 捌

笑ひ上戸ひとり混じりし初懐紙 ゑみこ  
 心榮しく集ふ松明 郁子  
 春の潮かもめつきくる帆船に 啓世  
 名残りの雪の遠き山並 和代  
 朧月田毎々々を見回りに 碧  
 露店風呂にて憩ふ一献 慎二  
 フルートの巧みな曲の流れ来る 郁  
 テディベア抱き英文科卒 和  
 女医さんじゃ素直な返事うちの夫 二  
 結んで貰ふきぬぎぬの帯 和  
 実方の墓夕立に洗はれぬ 啓  
 いつしか河鹿鳴きぞめし川 同  
 アップルティーチョコクッキーを添へて出し 和  
 ロンドン塔に仰ぐ三日月 二  
 文豪の鬱病の跡うすら寒 郁  
 綱取りに賭け励む巡業 碧  
 大鳥居花の階かけ昇る 郁  
 祝の字風揚げる幼と 碧  
 ピカソ画集開かれしまま弥生尽 郁  
 お手やはらかにエルニーニョ様 啓  
 飛び級は火星の夢を熱っぽく 郁  
 ねち巻き時計五分進みて 和  
 冬の蔵醪のふつと呟ける 二  
 江戸のグルメは鮎てんぶら 碧  
 雲水の美男揃ひにツイ迷ひ 郁  
 あばたもゑくぼみそかごとなり 啓  
 聖火リレー時々消える真昼月 和

何がなんでも猪突猛進

故郷はつくるものなり芋煮会 碧  
 僕の禁煙母もよろこぶ 同  
 戦争は医療器械を進歩させ 二  
 ザイールへ発つポランティア隊 碧  
 半世紀過ぎし歳月なつかしむ 和  
 白の卓布に染付の皿 啓  
 櫺子窓影をゆらして花簪 碧  
 耳を澄ませば鶯の声 啓

平成十年一月二一日 於 江東区芭蕉記念館

連衆 東郁子 中島啓世 長崎和代  
 松本碧 鈴木慎二

緑華亭連句会

歌仙「春の雪」

原田千町 捌

ひとしきり春の雪ともなりて舞ふ 千町  
 地唄の糸に冴返る床 瑞枝  
 渡り漁夫母国訛りの交じるらん 孝子  
 電子メールに探すアドレス 蘭石  
 新しい書齋に求む月球儀 好敏  
 いとどの脚のばね仕掛けなる 悟乃  
 火祭りの鞍馬に單車連ねたり 枝  
 あなただけに：と吟醸の酒 孝  
 恋愛ノ自由ハコレヲ保証スル 石  
 錆びてぼろぼろ有刺鉄線 同  
 口笛で迷彩服が犬を呼び 枝

膝折り祈る薔薇の僧院

夜濯ぎの終りし庭に出づる月 敏  
 ほまちの銭を数ふ行商 孝  
 この冬のインフルエンザ鎮静し 悟  
 オリンピックに籠る梟 枝  
 蒼穹に花の冠を戴きて 石  
 菜飯握りを一口に食ひ 敏  
 卑弥呼の鏡掘り出されし弥生尽 同  
 貼れば巡査が剥がすポスター 同  
 詐欺師にも天賦の才のあるといふ 孝  
 隔世遺伝旋毛ふたつ 悟  
 呪はれし人形の瞳の硝子玉 同  
 皇子にこがれし采女絶唱 枝  
 結ばるる南の島の砂熱し 同  
 賛否割れたるヘリポート基地 孝  
 エコマーク付いてゐるもの割高で 石  
 托鉢の鈴風を行く 孝  
 月斬ってびたり納めし居合抜き 枝  
 あと幾度の秋と書く文 孝  
 黒深きオリーブの籠積み込まれ 敏  
 ブイヤベースの滓にのら猫 石  
 退役の略章常に襟の先 悟  
 日帰り出張土産買ふ駅 同  
 花の夜は夢にも花の散りかかり 同  
 享保雛のおほどかな眉 町

平成十年二月十五日 首尾  
 連衆 大窪瑞枝 坂本孝子 吉澤蘭石  
 豊田好敏 日下悟乃

敏 町 同 悟 石 敏 孝 枝 孝 石 孝 同 枝 同 悟 孝 同 敏 石 枝 悟 孝 敏 悟 孝



「田一枚植て立去る柳かな」の謎(2)

日高英二

表題の芭蕉の句には次の四種類の解があることを前回述べた。

- ① 田を植えて立ち去るのは早乙女たちで、芭蕉はそれを眺めている。
- ② 田植一枚が終わるのを待って、芭蕉が柳の下から立ち去る。

- ③ 田を一枚芭蕉自身が植えて立ち去る。
- ④ 田を一枚植えて立ち去るのは柳である。

このうち江戸時代より解釈の本流をなしてきたのは露伴も肩入れしている②の解で、山本健吉の見事な鑑賞によってそれは決定的になったように見える。氏は言う、『・・・西行の「しばしとてこそ」を下地にして、「田一枚植えて」の詩句を導きだしてきたところがこの句の手柄である。「立ち去る」は、だから、西行の「立ち止まりつれ」に抛りながら、それにつづく状態を、弁士代わって言い継いだ形で、一句全体が西行の歌に和した関係になっていく。しかも新しく眼前の田植の印象的な風景を点綴することで、和歌的抒情を俳句的客観化に転化している。』と。非の打ち所のない解で、無論私も賛成せざるをえない。しかし、なにかもの足らない。しかも氏はさらに、『だが、この句の欠陥は「柳かな」という結句の安易さにある。表現とし

てマンネリズムであり、この句においてそこだけが、詩句として完全に昇華しえていないのである。』と、再びこちらの頭を混乱に陥れるような言葉で、批評を結んでおられる。

しかし、混乱を起こすのは私だけではないらしい。この句の主格を誰にするかということと共に、「柳かな」をどう取るかによって解の色合が変わってくるからである。岩波の「芭蕉俳句研究」は合評形式の楽しい読み物であるが、この中で、②の立場をとる安部能成・太田水穂に対し、小宮豊隆・阿部次郎は、いわば①の立場を復活し、次のように述べている、『この句の生まれる時は強ち柳陰になくともよい。ある距離から柳を眺めていると、今までしんとしていた柳の向う田に百姓が大勢来て、がやがや言いながら田を植える。しばらくすると、その田一枚いつのまにか植えてしまつて、そのあとが又しんとする。その動と静とを背景にして「柳」を描いたものだと思ふ。』と。そしてこれにこんな議論が続く、『能成―小宮は少し考え過ぎる。「がやがや」の説も面白いことは面白いが。豊隆―しかしそうしないと「柳」が働かないよ。能成―十分働くよ。豊隆―しかしそれでは「柳」の歴史が働くだけなんだから。能成―否、前書からみてもこの由緒ある柳の下に立寄ることを興がっていることが解る。次郎―もっとも僕らのようにすると柳は一つの点景になつてしまふね。』

この議論は面白い、②の解はもっぱら前書との関連において句を解釈するものであるが、小宮・阿部説は句自体のなかに独立した俳味を探ろうとするものだからである。いわゆる「客観写生」の観点から俳味を探れば、このような解がでるのも不思議ではない。事実このような視点からすでに昔、其角の弟子で蕪村の師匠である夜半亭巴人が「早乙女の泥を除くや柳陰」と詠んでいる。しかしこの解では能成の言うごとく、この柳に寄せる芭蕉の感興が薄れてしまうのも確かである。

ところが、最近これらの解の上にさらに面白い解釈が加えられるようになってきた。それが③と④の説であり、それらはいずれも読取りの軸脚を謡曲「遊行柳」に移し、この柳の陰に「しばし」休らう間に夢幻能のシテ舞よろしく、③の説では芭蕉自身が、④の説では柳そのものが、すなわち柳の精が「田を一枚植えて立ち去った」という解釈である。これらの説は幻想的で美しい。しかもこのあたり「殺生石」・「遊行柳」・「黒塚」と謡曲の舞台を巡るので、芭蕉と曾良が自分達を諸国一見のワキ僧とワキツレに凝らして打ち興じていたとしても不思議ではない。私もこれらの魅惑的な解には大いに惹かれる。しかし惹かれたあとどうしてもまた不満が湧いてくる。それは、これでは西行に対する直裁な挨拶心がどこかに逸らされてしまうような気がするからである。

英語連句の試み 花鳥風月(5)

浅賀 淑代

春です。芭蕉七部集(『炭俵』)に其角の  
こんな愛らしい句を見つけました。

ねこの子のくんづほぐれつ胡蝶哉

この句を立句に、米国の俳人たちを交えて  
「付廻し二十韻」をと思ひ付きました。

発句 ねこの子のくんづほぐれつ胡蝶哉 其角

(kittens tangling

and untangling around

... a butterfly)

脇 土筆むくむく生ふる中庭 ゑみこ

(here and there in the garden

horsetails shoot up)

脇は吉村ゑみこさんが付けて下さいました。

発句の「くんづほぐれつ」の勢いを「むくむ  
く」と受けて、楽しいリズムの応酬ですね。

今回、英訳はサンフランシスコ在住の青柳フ  
エイさんにお願ひしました。フェイさんは昨  
春、佐渡で行われた国際連句会に参加されて  
以来、連句に熱心に取り組まれています。

発句、3ライン目の頭の「...」は詠嘆など

を表すために用いられる工夫で、ハイク詩人

(連句人)らに好まれる表現のひとつだそう

です。「かな」を Oh! や Ah! では大仰という  
ことなのかも知れませんが、脇の「むくむく」

のようなオノマトペア(擬音語、擬声語)は、  
英語での表現が骨折りののですが、shoot

とリズムを補って見事な訳ですね。

ところで、オノマトペアですが、R・H・

ブライスが「あらゆる言語のなかで、日本語  
は擬音的要素がもっとも豊富」で、「言葉の

音韻が事物そのものの模倣をなして」おり、  
一方、「われわれ(西欧)の文法書や修辞学

書のなかでは、擬音は(文彩)の一種として  
きわめて小さなスペースが与えられているに

すぎない」(『俳句の国際性』星野慎一著)  
と指摘するとおり、あちらの詩歌には、日本

語のような感覚的でいきいきとした擬音・擬  
声を見いだすのは難しいようです。童謡「マ

ザーグース」には Ding, dong, bell (トイン  
・ドン鐘が鳴る)や Cackle, cackle Mother

(goose(があがあ鷺鳥おばさん))など見られ  
て楽しいのですが・・・。

さて、第三、四の付は米国からです。

第三 twilight lingers---

by bicycle I cross

the suspension bridge

(暮れかぬる釣橋渡る自転車に)

四 challenged to a game of darts

in the neighborhood tavern Alice

(酒場でダーツの挑戦を受け)

面白い展開です。四句目の作者はアリス・  
ベネディクトさん。佐渡での連句に参加され

た米国俳人。電子メールを利用した連句もな  
さっています。では、五句目をどなたかに。

\* 連句と酒 \*

「極上の一滴」

蒲原 志げ子

朝の連続ドラマが酒作りの苦労話を  
事細かく流してくれる。女が酒から排  
除されたのは近代の事で、以前は女の  
介在しない酒はなかったと言われる。

若い処女が嗜み砕く口嚙酒、華奢な  
顎では耐えられぬ労働であつたらう。

刀自とは杜氏から来たと柳田国男は書  
いている。家の中心にいる刀自と酒作

りの采配が同根とは面白い。又、絹を  
紡ぐにも女の唾液が良く、寺では桑を

植え、酒と絹を作るため沢山の女を養  
って居た。為に風紀を乱すとして禁止

令が出た。家刀自が主催する酒盛りに  
は風流な詩が歌われ『万葉集』にも残

されているが、これは一種のカモフラ  
ージュで、権力者を欺き謀議が行われ

もした。洋の東西、権力を握った者は  
漫然と酒を飲み、不遇の者は酒と詩が

一致した。

極上の一、一巻が出来るにはまだ  
まだ道の遠い事を痛感する。

## 祝 宗匠誕生

平成十年四月二十六日、亀戸天神社奉納俳諧の席で、左記の方々が猫蓑会主宰東明雅先生から庵号を授与され、「宗匠」におなりになりました。

長い間の御研鑽がみのり、この名譽を受けられましたこと心からお祝い申し上げます。立机式は来春になりますから、皆様ご一緒にお祝い申し上げます。

新宗匠五名の御名前と庵号を入門順にご紹介申し上げます。

大窪瑞枝さん 唐猫庵瑞枝 昭和五十六年  
後期入門。今回の正式俳諧で執筆を勤められます。長唄の名手。

上月淳子さん 冬霞庵淳子 昭和五十八年  
後期入門。俳句は「狩」

原田千町さん 臥猫庵千町 昭和五十八年  
後期入門。俳句は「未来図」。今期からA Cの「連句入門」で講師を勤められます。

豊田好敏さん 袖菊亭好敏 昭和五十九年  
前期入門。猫蓑会理事。

蒲原志げ子さん 卯遊庵志げ子 昭和五十九年  
後期入門。鎌倉うらら会主宰。

(式田和子)

## 星加宗一

杉内 徒司

上京された愛媛の星加宗一氏の歓迎連句会は昭和四十四年八月四日、両国の金子恭子居で張行。首尾した、歌仙の表は左の通り。

コンビナートの烟突夏に燃え熾る 星加宗一

日毎の晴のつづく夕焼 山路閑古

登山群カニ族といふ名をもちて 野村牛耳

柄杓一杯うまき井戸水 大林柚平

昏かりをのぼり二階の月仰ぎ 金子恭子

乱れ初めたる秋の七草 杉内徒司

都心連句会の月例会場は、農中金の目黒寮だが、臨時の張行は金子居を使っていたようだ。

金子さん所有の建物が三階か五階だったかは忘れて仕舞ったが、居室のあるフロアーに水道が流れ、小さな水車が廻っていたことを覚えているが、初めてあった星加宗一氏については何も覚えていない。

その後四十七年五月七日、俳書蒐集家としても知られている俳人幡谷東吾氏を訪問した折、星加氏の師山田孝雄氏との共著「連歌式綱要」「戦陣千句」や「宗祇発句集」を拜見し、星加氏が連歌研究の大家であることを遅まきながら知った。そして幡谷氏に星加氏の

ことを熱心に尋ねた為か、記念にとて星加氏の著作『俳人村上露月―特に転和吟を中心として―』（昭和四十六年六月刊）を頂いた。

その後、村山露月の四男平四郎氏（坦々）と、ある俳句会で三年程顔を合わせていた折、私が連句をやっているというので、星加氏と同じ本を頂戴した。

更にその後、村上半太郎（露月）翁生誕百年祭実行委員会発行『露月句文集』（A5判五六〇頁、昭和五十三年十一月刊）を繙く機会があった。

村上半太郎は明治二年松山市生れ、昭和二十一年二月没、七十八歳。

村上半太郎は正岡子規の二年後輩、青雲の志に燃え上京したが、二十四年夏第一高等学校一年生の時中退、郷里で稼業を継ぎ、二十六年頃は今出銀行頭取となり地元経済の為に尽した。二十五年頃大阪へ出張した露月（村上）は購入した俳書の中の『蕪村句集』（上巻）にいたくひかれて熱心に何度も読んだという。

その頃東京の子規は日本新聞入社、伊藤松宇の「椎の木」のメンバーとして俳句研究に熱中、蕪村の句に注目し始めていたが、まだまとまった『蕪村句集』を見ていなかったが、のち村上発見の「蕪村句集」をみた事が俳句開眼になったといわれる。

『俳文学大辞典』の村上露月の項には「和漢の漢詩に唱和する転和吟を創始した」とあるが、転和吟については記載がない。

【Q】 前には(第二十八号)根津芦丈先生との出会いのことについてうかがいましたが、芦丈先生の連句の特徴や面白さというのとはどこにありましたか。

【A】 芦丈先生の捌きは、第一に付けと転じを重視され、付けの大原則として、「あるものは付く。無いものはつかぬ」・「根を切れ」・「続きを言うな」と教えられ、転じでは「付方自他伝」の手法を重んずるけれども決してそれにとらわれないようにさとされました。これを芦丈先生は「芭蕉の心法」として、教えられたものです。

「芦丈翁俳諧聞書」には、芦丈先生捌きの信大連句会作品第八号「雪」の巻が連載され、先生の自解が付けられておりますので、これを読めば芦丈先生の作品の特徴も面白さも十分読み取る事ができるでしょう。

たとえば、この巻ウラの一連に、

十六 土にはほせて早き物の芽

十七 花の道善の綱に続きるて

十八 巣こぼれ雀どこぞかに鳴く

とあるのは、猫蓑なら十六・十七・十八ともにも場(人情なし)の句として嫌われるでしょう。

芦丈先生は、十六は畑か何かで植物の句だし、十八はお堂か寺の辺りで生類が出ており、

変化しているからよいとされたのでした。このように、はっきり理由があれば、自・他・場それぞれの三句続きでも否定されませんでした。これが「芭蕉の心法」というものでありましょう。

私は連句というものは、世態人情諷交詩で、世態や人情にわたってあわれな事、おかしき事を詠んだものが、読む人に最も感銘を与え、すばらしい作品だと考えているのですが、この点は芦丈先生も同様で、ことに恋句は連句の花であり、柱であり、魂であるとして尊重されました。そして、次のような句を掲げて実作の参考としておられます。

1 ちさき店出して櫛田の出はづれに

二親の日もまいる墓なき

2 濡足袋で直に火燧へ迂りこみ

教へて云はず掛のことはり

3 政子の石のぬくき人肌

膝なんど濡らして給べと稚児を抱き

1・2は別に註は不要でしょうが、3は人の赤ん坊に尿をかけられると子供が出来るという迷信と、鎌倉鶴が岡八幡宮にある陰陽石とを付け合わせたもので、1・2・3ともに恋とか愛とかの言葉は一字も入っていないのです。これらは、芦丈先生の豊富な人生体験と温かい人柄により生まれた個性的な句で、これこそ世態人情のあわれとおかしみを描き出しているものでしょう。

◇ 猫蓑発展基金ご協力有難うございます。

六口 天の川連句会東京支部

一万円 浅野欣也 倉本路子 神楽坂連句会

四千元 諏訪欣二

五千元 島村暁巳

(敬称略)

◇ 一口三千元より随時お受けしています。

基金の口座 富士銀行新宿西口支店

普通3376045 猫蓑基金

.....S.....S.....

あとがき

○ 古本屋で買った『知的好奇心』(波多野 誼余夫)という本をめぐっていたら、「対象があまりに新奇複雑であれば、好奇心を通りこして怖れが生ずる」とあった。連句で「付かず離れず」と教わるが、根っこの理由はこんなところにもあるのかな、と思った。

○ 地球温暖化のせい、植物の開花が早い。花の機嫌をうかがい、催しの幹事はヤキモキする。現代に、そんな「花本位制」は楽しい。

季刊 「ねこみの通信」第三十一号

発行者 猫蓑連句会

編集人 千一九五 町田市金井61716

佛淵健悟

印刷所 アトリエ・Neko